

# “とどめなく” と “とめどなく”は？

持田由幸 (神奈川大学)

この違いに何人が、気が付いたであろうか？「とめどなく」なら、常識の教養を備えている。気が付かない者は、物事の事象に無関心、どうでも良い事なのである。しかし、これは大きな、大きな問題なのである。少なくともタイトルになった言葉である。作者の意図を読み取るべきである。我々は、「日常の何でもない時の流れ」に甘んじ過ぎている。これでは、新しい発見（研究）を見いだす事、新規開拓は不可能である。小手先のチョコチョコした仕事など糞食らえである（TMS研究会の発足は、ひねくれ人間の集団であった。常に、何事にも疑問を抱き、解決を目指した者の素晴らしい集団であった。）。現状の日本を見て欲しい！。日本はあまりにも飽和しすぎている。無気力な草食系の数が増している。しかし、時は“とめどなく”事は流れている。

「とどめなく」は残念ながら志田先生が退職されて、研究の遂行ができなくなってしまった事である。多くの研究者が退職で研究生命を絶たれている。もったいないというより、健康な研究者の活躍の場をもぎ取るのは、日本の損失である。現にこれらの研究者が韓国から中国に流れて活躍している。そして、挙句は日本の産業の空洞化を招いている。

ささやかな源流から湧き出た清流は、順に大きな溪流となる。それは、やがてダムに堰き止められて流れの息は止まる。しかし、一部の水はダムより流れ出て、やがて大河となり大海へと発展する。鮭は稚魚から選ばれたもののみ、大海に船出する。そして、立派な成魚となり大海から生地の渓谷に帰る。ところがダムの存在が行く手を遮る大きな試練が待ち受けている。ここで大部分の鮭の行く手は行きと同じく“とどめ”を刺される。がダムの脇には魚道がある。ダムで遮られた魚も元気があれば上流へ行くことができる道である。次世代の元気な担い手への道である。この魚道は、「とどめなく」がこれら若き研究者に未来を託し、あるいは指導する先輩の言葉である。サイクルは繰り返すのである。志田先生からは、力強く、「とどめなく」―「MS に貢献するよ」のお言葉を頂いた。

勝新太郎の映画の感想を長唄三味線方の杵屋勝東治さんは「いけませんね、万年リズムです」と答えたそうだが、マンネリズムの勘違いであろう。しかし、言葉の違いだが、こちらは楽しい。型にはまって新鮮味のない「マンネリズム」より時を刻む古時計の針のようで、どこか安らぎを抱く。今回、講演者には、狭き、急な魚道をモノとせずこれからの未来を託せる元気な若い人、古時計の針のように、しっかりした研究生活を送られた先生方に“MS への潮流と想い”も込めてお願いした。素晴らしい講演に聴講者も満足して頂けたと思います。ありがとうございました。

表紙の写真：

志田先生は山、花が好きである。所要で北海道の富良野に咲き誇るラベンダーを觀賞する機会に巡り合えて、山を背景に写真に収めた。ラベンダーの花で志田先生の“とどめなく”であり、“とめどない”これからの人生への花輪の手向けである。

非哉非哉。非中之非。前川麻耶さんの事である。仕事の素晴らしい業績はさる事ながら、家族を大事にした事を思うと胸に詰まる。「手をのべてあなたとあなたに触れたときに息が足りないこの世の息が」（歌集蟬声より）これも山の彼方に空がある花輪で見送った。

2011年はとんでもない事件が多発した。そして、日本の進路は舵取りの難しい時代に突入した。「頑張ろう日本」。仕事や研究以外は、「とどめ」されないように穏やかな心にゆとりのある「とめどない」平和な日本にしましょう。